

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

中南米研究調査の旅から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2010-02-16 キーワード: 作成者: 藤井, 龍彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004654

中南米研究調査の旅から

藤 井 龍 彦*

以下の記録は、1975年7月上旬より、1976年1月上旬の半年の間にわたった、中南米における調査および収集活動の報告である。なお今回の調査収集活動は、前半の10月半ばまでは昭和50年度文部省科学研究費補助金海外学術調査の中、核アメリカ調査団の団員として、後半は、昭和50年度国立民族学博物館海外資料収集として行ったものである。

核アメリカ調査団は、団長寺田和夫(東京大学教授)以下、小片保(新潟大学教授)、友枝啓泰(埼玉大学助教授)、加藤泰建(東京大学助手)、丑野毅(東京大学教養学部)に筆者の加わった6名のメンバーで、小片教授を除いた5名は、ペルー北部高地、アンカシュ県コロongo郡ラ・パンパ村付近の遺跡を中心として、約2カ月の間発掘調査を行った。この調査の報告に関しては、別の機会に詳しく行われる予定であるのでここでは触れない。

10月半ばに発掘を打ち切り、ペルーの首都リマに降りて来た後、筆者は団員と別れて数日間の準備の後、ペルー中部高地のワンカヨ市を中心としたマンタロ谷地

域の調査収集に向った。10月末のペルー高地は、既に雨期に入っており天候が心配されたが、幸い午後には夕立ちがあっただけで、天野博物館のジープを借用して、マンタロ谷のかなりの部分をまわることができた。ワンカヨ市は、リマ市から約300km、途中4,800mを越す峠を越えた山間の盆地にあり、標高は約3,300m、フニン県の県庁所在地としてこの地域の中心となっている町である。日系人の数も多く、約200家族を数え、リマ、カヤオに次ぐ。市周辺は一般にマンタロ谷(Valle de Mantaro)とよばれる広大な盆地で、ジャガイモ、トウモロコシ、麦類を中心とした農村地帯である。町の中には、比較的大きな織物工場があり、また多くの商店もみられ、農産物の集散地、また商業の中心地として栄えている。当地在住の柏原さんのお世話で、マイエルさんというドイツ系のおばさんを紹介して頂く。彼女はこの地域の民芸品、手工業について実に詳しいデータを持っており、一方自分で小さな機織り工場を持ち、またその工場の一隅を博物館として資料を公開しているというように、実に有能かつ親切な人で、筆者のワンカヨ市周辺の活動は彼女に負うところが多い。12月の第一週は、彼女から得たデータに基づき、ひょうたん細工、織物(いざり機による)、木彫、土器製作、刺繍等をやっている部落を訪れ、資料の購入、写真撮影その他のデータ収集を行った。しかし残念なことは、雨期の到来と共に大部分の部落で畑の耕作、播種が開始され、家で手仕事に携る人がほとんどみられなかったことである。

* 国立民族学博物館第4研究部

ワンカヨ市はペルーで最大の日曜市が開かれるところとしても有名であり、最後の一日はこの日曜市を歩いて必要な資料の購入にあたった。しかし現在はこの日曜市も観光化し、店の大半が観光客目当ての土産物屋になってしまっている。当日の午後、購入した資料をジープに載せ、再び4,800mの峠を越えて夜中にリマに帰着した。

数日後クスコへ出発。今回は距離的に遠いこと、雨がひどくなり道路事情が悪くなる可能性があることなどを考慮して飛行機で行く。案の定、クスコに着いた日はよかったが翌日から一週間のクスコ滞在中雨にたたられ、周辺の部落へ出ていくことが不可能であった。結局、市内のマーケットや店で衣裳を主とした収集を行ったにとどまり、また資料に関するデータも充分には得られなかった。収集品としては、前述の衣裳の他、踏みすき、太鼓、角笛、インディアン・ハープ等の楽器が主なものである。

再びリマに戻り、これまでの収集品を仮梱包して、ボリビアに向う。首都のラ・パス市では、日本人会長をなさっていた井門、山根両氏にお世話になり、またボリビア・トヨタの田中専務、そして特に島旅行社の島袋、渡辺氏には、車の手配や資料を預かって頂いたりして大変お世話になった。ボリビアでも丁度日本と同じように、従来からあった民芸博物館を拡大強化して、民族学・民俗学博物館を建設中で、館長を尋ね将来の協力を約した。ラ・パスでも雨にたたられ、標高3,600mの地で寒さにふるえながら、踊りの衣裳を探しまわったりした。ボリビアの収集を終え、資料の発送を渡辺氏に依頼して、パラグアイへ向う。

パラグアイの首都アスンシオンは、寒いラ・パスとは一転して熱帯の地。気候の急変にもめげず、有名なパラグアイのハープを購入するために町中を歩きまわる。幸いホテルの際に製作している工場があり、日本に空輸してもらうことで話をつける。

その後、アルゼンチン、ブラジルとまわったが、博物館にいて挨拶をしただけで、何れも収集活動は行わず、約20日の旅を終えて再びペルーへ戻る。以前の経験からペルーにおける民族資料の送り出しに関しては楽観していたが、いざ手続きをしようと思って文化庁に行くと、全ての資料の写真を2枚ずつキャビネ版に焼き提出し、文化庁の学者の検査を受けなければ輸出許可は出せないといわれ、早速許可依頼の書類を提出する。その上毛皮、毛織物に関しては食糧省の許可があることもわかり、梱包をほどいて、撮影やら何やらの準備に転手古舞をする。文化庁の方もペルーから密輸出された先インカの土器の接収その他で忙しかつたためもあり、仲々検査に来てくれず、結局許可証をくれたのは12月も下旬となってしまった。幸か不幸か載せて行く予定のNYKの船の出港が遅れたので、何とか積出しに間に合い、調査団の加藤氏に発送手続きを託してグアテマラへ出発する。

グアテマラは丁度年末年始で、大使館は開いていず、博物館や研究所なども行っても仕方がないという状態で、全く仕事にならなかった。ただ、日本人の若い人で現地に住み込んで焼物や織物の研究をしている人たちを知り、将来彼等の持っている生のデータが有効に生かされるという期待が持てた。またグアテマラ市には、当地に既に5年以上滞在して民芸

品の調査研究に当たっている児島英雄さんという方がおられ、今回は残念ながら活動はできなかったが、将来何らかの形でじっくりと調査を行える絶好のフィールドであると思う。

最後にグアテマラからメキシコに行ったが、僅か2日の滞在で、国立人類学歴史学研究所と国立文化博物館を訪ね、協力を依頼して来たにとどまる。メキシコの文化博物館長の Julio César Olivé 氏

は、日本の展示を充実させたいと考えており、資料の交換を強く希望していた。

終りに今回の収集調査でお世話になった、ワンカヨ市の柏原夫妻、リマ市の津田一家、同じくペルートヨタの川崎社長、浜野氏、ラ・パス市のポリビア・トヨタの河合社長、田中専務、島旅行社の島袋、渡辺氏、元ラ・パス市日本人会会長の山根氏、同じく前会長井門氏に感謝を述べたい。